

【59】卑弥呼と日食

古代人にとって、日食や月食は自然界の不思議の最たるものであって、洋の東西を問わず、忌むべきものか神聖なものかの評価は異なるようですが、恐れられ、崇められ、そして文字を持つ文明では記録されてきました。

わが国の古代史もその例に漏れず、太陽神の性格のある天照大神の”岩戸隠れ”の話は、日食のことを神話化したものと解釈されています。

さて、神話に頼らない現代の日本史で古代最初の話題というと、3世紀ごろの邪馬台国と女王の卑弥呼のことですが、他国である中国の史書にかなり詳しく記されているので（魏志倭人伝）、事実だろうとされています。

大問題は、その邪馬台国の場所が不明な事です。魏志倭人伝の舞台が主として北九州なので、邪馬台国は北九州だろうという考えと、主として考古学の知見から大和（奈良県）だという考えが対立し、学会のみならず歴史に興味のある一般人まで甲論乙駁という状況が続いています。

しかし、この論争には決定的な証拠が無いので、九州の吉野ケ里遺跡だの、大和の纏向（まきむく）遺跡だのとその時々考古学的発見でどちらが本当かと議論が活発になります。

ところが、現在のところ科学的に見て殆んど唯一というべきデータが存在します。

それが冒頭にお話しした日食です。

西暦 248 年 9 月 5 日早朝、日本に日食が生じ、とくに大和地方では太陽面が 93%も欠けるという殆んど皆既日食に近いものでした。これは天文学の過去の日食の再現計算によるものです。（※）

この年号を聞いて驚かないわけにはいきません。西暦 248 年というのは、魏志倭人伝では卑弥呼が急死したとされる年なのです。この一致は只事ではありません。

1700 年前の出来事を書き伝えてきた年号が、無味乾燥な天文学の計算にピッタリ一致するというのは偶然ではありそうも無いでしょう。

卑弥呼が 248 年に死んだのは、日食により彼女の統治機能が失われて殺されたのかも知れないと想像できます。

そして、この強烈な出来事が後世へ記憶として残り、天照大神の”岩戸隠れ”の神話になったのかも知れません。

精密科学の一分野の天文学の計算を昔に適用し、古代史の事件の年を定める学問を”古天文学”と云いますが、その活躍が楽しみです。

（※）古天文学の散歩道、斎藤国治、1992

（斎藤先生は、東京天文台の教授で、古天文学という分野を開拓された人です。）